

ソ連抑留を思い出し

茨城県 山崎 勝一

満州国第一国境守備第二地区隊歩兵隊第一中隊を三年一カ月で満期除隊、内地に帰郷しても急ぐ召集になるだろうと在満をする。

昭和十八（一九四三年）三月から関東軍司令部功績班に軍属として勤務する。昭和二十年八月二十四日武装解除される。二週間ぐらい、満州国延吉にソ連軍捕虜の取り扱いをされる。国境まで徒歩にて行軍、日用品と食糧を少量持って入ソする。

その後は鉄道貨車に詰め込まれ、貨車内に二十日ほど、汽車は北へ北へと走る。ソ連鉄道員に何駅

まで行くのかと聞いてもわからず、止まったところで急ぎモクハ收容所に入れられる。

鉄道敷地の開拓（日本の地図にはチタ鉄道と完成してある）、実際には未完成であり、ドイツ捕虜が先に鉄道敷を開拓し、その交替に我らが入ったので、主に伐採作業、土砂運搬等で、零下四〇度までは屋外作業、四〇度以上になると屋内作業である。食事は米が何粒か入った野菜と、本当に水のようなスープと一日黒パン二〇〇グラムとジャガイモ二個である。初めの頃はその食糧さえないので文字通りの吞まず食わずの生活である。栄養失調のため多くの戦友が死んだ。朝起きてみると横に寝ていた友が冷たくなっているのもしばしばである。死体は道路わきに雪を覆い、そのまま

ある。心から冥福を祈るのであった。伐採作業は三人一組で二二〇センチメートルの鋸を両方から押して切る。一人は倒れた木の枝払い作業である。自分も倒れた木にはね飛ばされて気を失って、

ソ連の監視兵にかつがれて医務室に五時間ほど入った。幸いにも体に異常なく帰った。山林は処女林のため伐採作業は一箇所のできる。次から次へと木にかかって二十本ほど倒れなくなった。監視兵が、危ないからお前達は遠く離れていると。監視兵が一本を切ると見事な音を立て二十数本が一度に倒れた。その木を六・五メートルに、次に四メートルに二本切る。夕方係員が切り口に目付と検印を押して一日に切った数（リウベ）を調べる。一日の作業が終わり鋸を背中に背負って收容所に帰る。食事もジャガイモ、一日に飯盒一杯で、二十日ぐらいの時もあった。

少し頭を使ってやれと朝早く現場に着くと、監視兵の居ない時に昨日切った材木を検印のある部分を一センチに薄く切って雪に埋めて、夕方監視

兵にこれもこれも今日切ったと言って、実は二本しか切らないのに八本も切ったように係員に言うのと、よし、今日は八本切ったのだということを楽しめたことがあった。

春になって雪が融け、伐採の数と搬出の数が合わず重営倉に一晚、食事もなく入れられた事もあった。ひもじさの余り馬糞をジャガイモと間違っ

て拾ったこともある。満四カ年で米を食べたのは数えるほどである、それも湯の方が多い粥である。また一時はノルマ給与で、今日の作業のパーセントが明後日の食事になる。「ノルマ表」という分厚い本には、すべての作業にノルマが国家として認めてあるのであ

る。身体検査が月一回ある。一級・二級・三級・オカと体格によって判定。ソ連の軍医の診断により決定される。まず回れ右させて臀部の肉をつかんで級を定める。内臓の病気などは余り関係がない。太って身長のないずんぐり型で肉づきの良い者は

いつも一級である。自分はやせて背が高い方なので診断でいつも三級で誠に幸せであった。作業も一級の者の二分の一で一〇〇パーセントであるので、その点では有り難かった。二級の者は一級の七五パーセントで一〇〇パーセントである。「オカ」は作業なし。酷寒零下五〇度とは、日本に住んでいる者にはとうてい考えられない。漫才等で、小便すると局部から地面まで弓なりの氷で続くという様な漫談があるが、それはない。小便をする和下から氷になって、上に直線になって四く五十センチぐらい上ってくる。便所掃除は「つるはし」と「えんぴ」である。満州では零下二〇度ぐらいが最高であったが、シベリアは立ってじつとしてはられない。足踏みをする。素手で鉄等に触つたなら、べたべたとねばる様で大変。また、水は本当に貴重である。コップ一杯で歯を磨き、すすぎ、口に水を一杯含んで両手に移して顔を洗う。ソ連人も同様である。誠に合理的である。ある時サボツたのを監視兵に見つかり銃を構えて追つて

が我らの帰還船である。

舞鶴港が見えた時は、泣きながら我慢して四年、帰れたのだと嬉しさは隠し切れなかった。舞鶴港に着くと、我らは乗船中の待遇が悪かったので上陸拒否したので、後から来た船の方が先に上陸する。明優丸の者が上陸する時は桟橋を警察官が一列に並んでのお迎えであった。二日ほど検査や帰還の手続きで、終了後、帰還列車に乗ると新宿まで父親と義弟が迎えに来ていた。自分は代々木駅で下車、共産党本部に行くと言ったが、父親と義弟の二人に押さえつけられ下車する事が出来なかった。

水戸、上菅谷駅では帰還兵に日の丸の旗を振って迎えてくれた。常陸太田駅に着くと家族、区内の皆様が御苦勞様でしたとお迎えに。また駐在所の巡査にまで御苦勞様でしたと言って軽トラにて送られる。

昭和二十四年八月十三日、五年振りに故郷に帰る。懐かしい故郷をしみじみと想う。

くるので同僚の間に入って知らない振りをしていると、我らがソ連兵を皆同じに見えるのと同様、彼らも日本人を誰か見当がつかず、お前か？違う、お前か？違うと誰も話さず、とうとう分からず、洪々と引き上げて行った。その時は自分に返った気がした。戦友達と嬉しい笑いに時を過した。

昭和二十三年十一月末日、帰還の名簿に入って、二昼夜貨車に乗って「ナホトカ」に着く。一週間待っても二週間たっても帰還の呼び出しがない。日本から船が来ないのでお前達はまた元の收容所に行つて作業をするようにとのこと。この時はお生まれ故郷には帰れないかと、がっくりと東の空を望み故郷を思い出す。それからまた二昼夜貨車に乗せられ、元のラーゲルに行く。またあの辛い作業をするのか、来年まで元気でいれば何とかなるだろうと零下五〇度の極寒に耐える。

二十四年七月に待ちに待った帰還の命下る。ナホトカに三日間待つ。我が日本船が真向いに見える時は本当に嬉しく涙が止まらなかった。明優丸

戦後の還暦に思う

富山県 窪谷 好信

激動の昭和は今や遠くに去らんとしています。幸いに生きながらえ、終戦から六十年目を迎えて先ず思い出すことは、シベリア抑留の苦難であります。

私は昭和十五(一九四〇)年徴集兵で第一乙種でしたが、現役兵として、十六年二月、敦賀歩兵第百十九連隊(中部第三十六部隊)に入営しました。旬日後に七尾港より渡満し、穆稜歩兵第十九連隊(満州第八〇二部隊)に到着いたしました。東部ソ満国境地帯にて警備の任に就き、昭和二十年六月、吉林省敦化第十六野戦兵器廠(満州第九三〇〇部隊)に転属となり、ほど無く、天皇の詔勅を拝し終戦を知りました。

戦わずして武装解除を受けてソ連軍の配下に入